



文法テストが測っている文法力再考

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 文法テスト

おそらく英語のテストの作成において、「文法テスト」の作成に困っている教師はほとんどいないだろう。それは教師自身がこれまでにたくさんの文法問題を経験してきており、他の領域のテストに比べレパートリーもたくさんあるためだ。

その代表的なところは、空所補充問題や並べ換え問題であろう。これらは、それぞれ単語の形式や単語の並べ方に関する力を見ようとしている。たとえば、ある文脈で、ここは am/are/is のうちどれが適切かとか、they/their/them/theirs のうちどれが適切かなどを見るのが前者のテストで、ある文型の文が与えられた単語で作れるかとか、分詞による後置修飾のある名詞句が作れるかなどを見るのが後者のテストである。

中学校の教科書や授業は、基本的に文法シラバスによっている。その意味では、このような文法テストは意味があり、それぞれのテスト形式の役割を正しく認識して問題が作られていれば、ある程度の診断機能も果たすことになるだろう。

2. 文法力再考

しかし、本稿では、そもそも文法力とは何であろうか、従来の文法テストで測ってきた文法力とは何か、文法力を見るには他の方法はないのか、というやや根本的な問題意識から出発したい。

まず、文法力について考えてみよう。ここでは、文法の「知り方」を考えてみる。ある文法を頭でわかっているということと、それを実際に文脈の中で使えるということとは同じではない。3 単現の s や複数形の s などは、大学生になっても実際の運用で

はよく間違える。おそらく知識としては知っていることだが、なかなか使えるようにはならない項目である。文法規則を文法用語などを用いて説明できる知識は declarative knowledge (おかしな訳だが「宣言的知識」と訳されたりする)、使いこなせる知識は procedural knowledge (こちらは「手続き的知識」と訳される) と呼ばれる。

また、文法知識は、explicit knowledge (明示的知識) と implicit knowledge (暗示的知識) という分類もできる。典型的には、母語の文法知識などは implicit なもので、explicit ではない。ただ、外国語でも、誤文を見たときに、なぜだかわからないがおかしな気がすると思えるのは、この implicit knowledge のおかげである。

こうした枠組みで文法力を考えるならば、従来の文法テストは、declarative knowledge かつ explicit knowledge を主に見てきていたといえるだろう (もちろん中には、明確に説明はできなくても implicit knowledge でできてしまう問題もあり得る)。こう考えると、私たちが文法テストで見てきた文法力は、かなり限定的な知識だったのではないだろうか。

3. 4 技能を通しての文法力の測定

文法力はすべての技能に関わっている。聞いた、読んだりするときにも、書いたり、話したりするときにも、もちろん文法は関わっている。したがって、これら 4 技能の使用を通して、文法力を見ることができるようになるはずである。

ただ、聞いた、読んだりという受容技能においては、特定の文法項目に関するテストは作成しづらい。文レベルの理解に限定したとしても、ある文法項目

の理解だけを見ることは容易ではないからである。そもそも、3 単現の s のようにコミュニケーション上の情報量のほとんどないものもあるし (David plays football every day. という文では、s はわからなくても文の理解にはまったく支障がない)、受動態などであっても、それを含む文にはいくつもの内容語が含まれ、その内容語をつなげるだけで語の関係性がほぼ推測されてしまう場合が少なくない。たとえば、Sign A is seen in Australia. という文は確かに受動態の文であるが、この聞き取りにおいて、A の標識とオーストラリアを結びつけることは、受動態を理解していなくても可能である。

では、話したり書いたりという発表技能の場合はどうだろうか。自由に話したり書いたりさせれば、確かにおおよその文法力は見ることができるだろう。しかし、特定の文法事項の測定を考えると、こちらがねらった文法事項が使われるとは限らない。

また、どれだけリスクを冒すかという個人差の問題もある。少しくらい自信がなくても使ってみるというタイプの学習者と、かなりの自信がないと使わないというタイプの学習者がいるだろう。

日本のような英語学習環境では、おそらく declarative knowledge は procedural knowledge に先行するだろう。つまり、まず頭でわかってから使えるようになるということだ。さらに、意識的に使おうと思えば使えるようになってからも、自分から選択して使いこなすというような「自動化」したレベルに到達するには、さらに時間がかかるだろう。

4. 新しい文法テストの提案

こうして考えてみると、従来の文法テストにおいて、ある文法項目ができたと判断されても、それは①その文法項目だけに着目して、じっくりと考えれば正解を得られるレベルなのか、②その文法項目を意識して使おうと思えば使えるレベルなのか、③その文法項目を特別意識しなくても使いこなせるレベルなのか、わからないのである。

もちろん①のレベルについては、従来の文法テストで見ることができるし、③レベルの能力の有無を見るのであれば、実際に話させたり、書かせたりす

ることになる。話させたり書かせたりしたときに、コンスタントに正しく使いこなせていれば、習得済みということができるだろう。しかしながら、中学の段階では、習った文法事項の多くは③のレベルまでなかなか行かないのが現状ではないか。

したがって、②のレベルの測定が、本来はもっと求められていだろう。ただ、これに関しては、テストはおろか指導の場面でも、ほとんど目が向けられてこなかったといえる。そこで、このレベルの能力をテストする方法を以下に提案する。イメージは、従来型の文法テストを口頭で行うというものである。たとえば、単なる並べ換え問題も、口頭で行うととたんに難易度は上がる。

us gives our teacher a lot of homework
→ Our teacher gives us a lot of homework.

また、従来型の be 動詞の現在形のテストも口頭で行えば、まったく別の問題といってもいいだろう。

次のポーズに am/are/is のどれかを入れなさい。
I ... from India → I'm from India.
Koji ... from Osaka → Koji is from Osaka.

さらに現実の会話らしくすることも可能である（このような問題では、どのように答えるかを示す例題が必要かもしれない）。

相手の話しかけに、反対しなさい。
You were sleeping during the English class.
→ No, I wasn't.

これらの問題は、おそらく目で見て行うことはさほど困難ではないだろう。ただ、これを口頭でできるかどうかは、習得段階に応じてかなり差が出るのではないか。これらを口頭で行うとなると、対面で行うことになり、実用性が下がってしまう。もし対面での実施が難しいようであれば、音声で問題を流し、答えは書かせるというような筆記試験でも、ある程度先述の②のレベルに到達しているかどうかはわかるはずである。